

V-111 モルタル目地を有するPC桁の変形と接合位置の間隔の関係

岐阜大学 正員 小林 和夫  
 〃 〇 学生員 岡田 隆彦

1 まえがき モルタル目地を充填したPC接合桁では接合面の付着強度が実質上期待できず、ひびわれ開口耐力が一体桁より低下するためたわみが増大する。このたわみの増大は接合面と一体桁断面のモーメント~回転角関係に着目するとかなり定量的に求めうる。ここでは相隣る接合部の間隔がせまい場合、その存在がたわみに及ぼす影響を接合面のひびわれ開口幅とひびわれ間隔を考慮した上で同様の手法で推定し、破壊耐力を検討した。

2 試験概要 図-1のようにPC鋼棒(ウルボン)とその配置をA~Eの5シリーズに変化させ、各シリーズについて曲げスパン中央に1ヶの接合部ならびに10<sup>cm</sup>間隔で3ヶの接合部を設けた2種類の接合桁と比較用の同一条件の一体桁を作製した。桁は本体部コンクリートの圧縮強度にほぼ等しい強度(600<sup>kg/cm<sup>2</sup></sup>)のモルタルを目地厚1.25<sup>cm</sup>で充填し、A~Eシリーズそれぞれ下縁で100, 60, 80, 70, 70<sup>kg/cm<sup>2</sup></sup>のプレストレスを与えて接合した。供試体の種類を表-1に示す。曲げ試験は図-1のような3等分点載荷とし、スパン中央のたわみとホイットモア型ひずみ計(検査長100<sup>mm</sup>, 最小目盛1/1000<sup>mm</sup>)でひびわれ開口幅を測定した。

3 結果と考察 一体桁に対する接合桁のスパン中央のたわみの比を図-2に示す。図示の計算値は同一作用モーメントに対するひびわれ開口幅から定まる接合面と一体桁断面の回転角の差に着目し、これに起因する接合桁の付加的たわみを考慮して算定したものであるが、相隣る接合部の間隔がせまいタイプIII

桁では次の点を考慮に入れて求めた計算値(図示の点線)も併記した。表-2はタイプIIの接合桁について、中央の接合面とその面横の一体部に発生するひびわれ間隔を一体桁の曲げスパン内の平均ひびわれ間隔(2本の平均値)と対比し、併せてBroms<sup>2)</sup>による推定値を示したものである。また、図-3はタイプIII桁において全て開口し

表-1 供試体の種類と破壊荷重

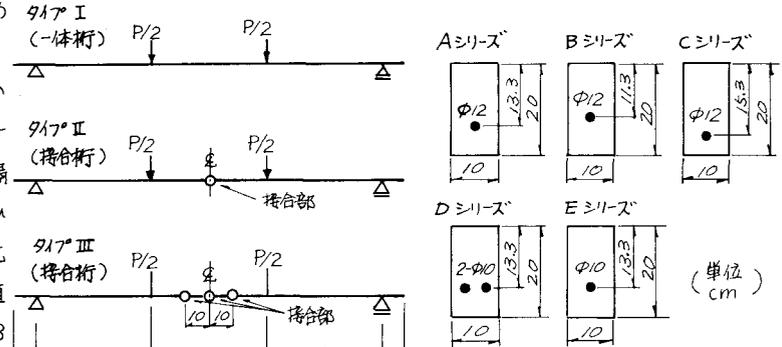
供試体種類	タイプ	鋼棒直径	有効高d(cm)	曲げ破壊荷重		
				実験値Pu(t)	計算値Pj(t)	Pj/Pu
Aシリーズ	JOA I	φ12	13.3	6.71	7.04	0.95
	J1A II			6.55	〃	0.93
	J3A III			6.65	〃	0.94
Bシリーズ	JOB I	φ12	11.3	5.94	5.77	1.03
	J1B II			5.76	〃	1.00
	J3B III			5.97	〃	1.04
Cシリーズ	J0C I	φ12	15.3	7.78	8.04	0.97
	J1C II			7.95	〃	0.99
	J3C III			7.77	〃	0.97
Dシリーズ	J0D I	2-φ10	13.3	8.20	8.74	0.94
	J1D II			8.05	〃	0.92
	J3D III			8.05	〃	0.92
Eシリーズ	J0E I	φ10	13.3	4.69	4.65	1.01
	J1E II			4.90	〃	1.05
	J3E III			5.00	〃	1.08

表-2 曲げスパン内のひびわれ間隔

供試体シリーズ	PC鋼棒		一体桁の平均ひびわれ間隔 a <sub>1</sub> (cm)	接合面との面横に発生するひびわれ間隔 a <sub>2</sub> (cm)	a <sub>2</sub> /a <sub>1</sub>	Bromsによる推定値 a <sub>2</sub> (cm) a <sub>2</sub> <sup>2</sup> =2(h-d)	a <sub>2</sub> /a <sub>1</sub> <sup>2</sup>
	鋼棒量	h-d (cm)					
Aシリーズ	φ12	6.7	15.5	18	1.16	13.4	1.16
Bシリーズ	φ12	8.7	17	20	1.18	17.4	0.98
Cシリーズ	φ12	4.7	12.5	15.5	1.24	9.4	1.33
Dシリーズ	2-φ10	6.7	17.5	18	1.03	13.4	1.31
Eシリーズ	φ10	6.7	17	20	1.18	13.4	1.27

\* h: 断面全高(ここでは20 cm)

図-1 供試桁の断面・寸法



た3ヶの接合面のひびわれ幅の和 $w_3$ とタイプⅡ桁の1ヶの接合面のひびわれ幅 $w_1$ の比 $w_3/w_1$ を示したものである。

表-2によると接合部近傍領域のひびわれ間隔は一体桁より15%程度大きく、一体桁のひびわれ間隔はBromsの推定値より20%程度大きい。したがって、本実験結果では接合部近傍領域のひびわれ間隔は式 $1.15 \times 1.2 \times 2(h-d) = 2.7(h-d)$ となること示され、これ以上の間隔で接合部が存在する場合は各接合部が単独に存在する場合と同じ作用を呈すると考えられる。図-3によると、 $w_3/w_1$ は3.0とはならず2.0程度となっている。したがって、タイプⅢ桁のように接合部が10cm間隔に配置された場合は3ヶの接合部のひびわれ幅の和は各々単独に存在した場合より小さく、実質的には2ヶの接合部と同じことになる。

図-2中のタイプⅢ桁に対する点線の計算値は、以上のことから20cm離れた両端の2ヶの接合部のみに注目し、これが単独に存在すると考えて上記の手法によって求めたものであって、3ヶの接合部の影響を加算するよりも一層合理的にたわみを推定することができる。なお、本実験の結果では相隣る接合部間の有効間隔は $2.7 \times (h-d)$ 程度と考えられたが、この点についてはさらに検討が必要であろう。

一方、表-1に曲げスパン内において生じた曲げ破壊荷重の実験値と計算値を示す。それによると、タイプⅢ桁のように接合部が密な間隔で多数設けられても、曲げ破壊荷重は一体桁と差異のないことが認められる。

(文献)

- 1) 小林: モルタル地を用いたPC接合桁の破壊耐力と変形に関する考察, 土木学会論文報告集, No.289, 1977-3
- 2) Broms B.B. (森田訳): 鉄筋コンクリート桁のたわみとひびわれの研究, コンクリート誌 Vol.4, No.2, 1966-2

図-2 一体桁に対する接合桁のたわみ比

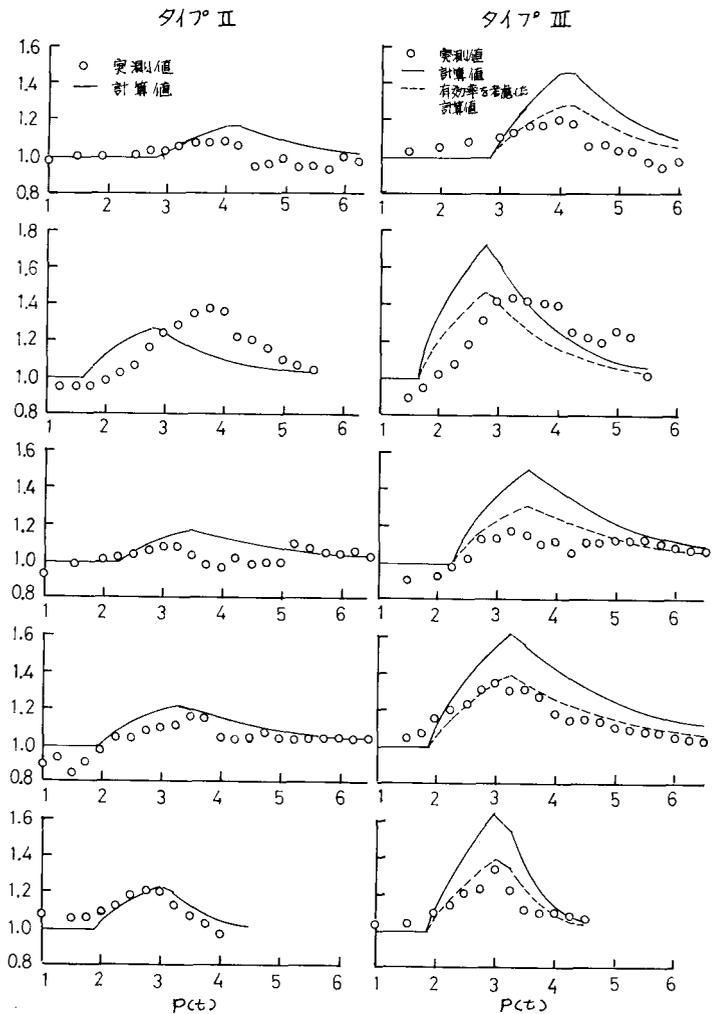


図-3 ひびわれ幅比 ( $w_3/w_1$ )

